

バイオ系のキャリアデザイン

新たな夢への挑戦

坂井 美穂



『熊本の私立大学工学部バイオ系学科を卒業し、学位を取得後、紆余曲折あったものの、現在は大分県内の私立大学工学部にて教員をしている。』と略歴を書くと、何となくではあるが、博士号を取得後、順風満帆、うまく立ち回り、キャリアを構築してきた女性というイメージを描くのではないだろうか？

おそらく、ではあるが、今回「バイオ系のキャリアデザイン」の執筆を頼まれたのもその誤解がもとになっていると思われる。嬉しいような悲しいような誤解である。誤解ではあるが、反面教師として私の進んできた道が何らかの役に立つのなら、と筆をとった次第である。

足踏みを続けるということ

私は「女性」である。女性が日本でキャリアを継続するために重要なファクターとなると思われる“結婚”と“子育て”について、はじめに触れておきたいと思う。

私は、キャリアを構築するのにもっとも重要だと考えていた30代に“結婚”，“妊娠”，“出産”，“離婚”を経験し、ひとり子育ての現在進行形である。結婚した時もそうだったが、妊娠、出産の時さえ、「仕事を辞める」という選択肢が私の中には思い浮かばなかった。なぜかわからないが「仕事は続けるもの」というのが私の中の核だったともいえる。仕事自体は中断せずにすんだが、キャリア形成という意味では、結婚、妊娠、出産の時期に仕事の継続をあきらめる人と同じかもしれない(女性がキャリアを継続していくのは「育児休業法」や「男女雇用機会均等法」「男女共同参画基本計画」，そして、2016年4月から施行された「女性活躍推進法」などの法整備とともに幾分できやすくなったのではないだろうか。ただし、理解あるパートナーや手伝ってくれる家族があれば、である)。

数年前までは今は亡き母が家庭の支えとして、息子の保育を担当していた。そのため、私も一泊二日程度の出張はできた。しかし、その母が亡くなった後は、さすがに小学生の息子を家に一人、カギっ子にして留守番させるわけにもいかず、出張さえままならぬ状態になってい

る。「子供をとるか、キャリア(出世)をとるか」まさにハムレット、二律背反の心境である。

そういう心境ではあったが、日々、成長していく子供と向き合ううちに、義務教育を終了するまでは母業中心、自分自身のキャリア形成はしばらくお休みをすると割り切った。「キャリア形成をお休みする」とはいつでも完全に止まるわけではなく足踏みをしている状態。いわゆる、「前に進め」と号令をかけられた時に、すぐに「新たな挑戦」のための一歩を踏み出せるように準備をしている状態。それがかれこれ10年以上続いている。実に長い足踏みだ。

青い鳥症候群

現職は冒頭にも書いたように、私立大学の工学部、情報系学科で教授をしている。大学に着任したころは、化学系の学科に所属しており、それなりに、夢と希望を持って学生教育を開始した。しかし、着任して8年、化学系学科が大人の事情で閉学科となり、所属は情報系学科へ。このころから学生教育の内容は教養科目である数学や文章表現、情報リテラシー科目へ移り変わっていった。それと同時に「研究者でいたい」「科学者でありたい」という夢を失っていき、足踏みが止まりかけていた。

いまでこそ「ご専門は?」「大学で何を教えているのですか?」という質問に、「学生時代に学んだのは微生物学や遺伝子工学ですが、今は母業かもしれません。」や「大学で教えているのは数学や文章表現などの基礎教育、初年次教育やリメディアル教育です。」と、苦笑いとともに答えられるようになった。しかしながら、ほんの数年前までは何も答えられず、消え入りたい気持ちでいっぱいだった時期があった。周囲への連絡はおろか、知人や友人にさえ会おうのを避けてきた(そのため、この一番人脈を築く大切な時期に人脈を築けないままにきたのが、最大の失敗だと考えている)。

ポストドク期間を経て、運よく定職を得ることができたにもかかわらず、足踏みが止まりかけたころから、毎日のように「私はなぜここにいるのだろうか?」と自問自答

し、「辞めよう」と後ろ向きなことばかり考え続けていた。青い鳥症候群ではないけれど、「私のやりたいことはこんなことではない」と具体的な「やりたいこと」を自分でつかむ努力をどこかに忘れ、環境のせいにして悶々としながら、「仕事＝金銭を得る手段」と割り切って毎日を過ごしていた。もちろん、「辞めよう」と思うことはあっても、辞めるための活動は一切せず、ただ、「辞めたい、ここじゃない」と思うのみ。スパッと行動できなかったのは「何もできない」ということを自分でわかっていたことと、「何もできない」という現実を突きつけられるのが怖かったからに過ぎない。

そんな青い鳥症候群を満喫していた私にも、唯一、足踏みを継続させる理由になるものがあつた。それが、大学に着任してすぐから仲間に入れていただいた「大分県理科・化学教育懇談会」主催で開催される、年1回の「夏休み子供サイエンス」である。

夏休み子供サイエンス

「夏休み子供サイエンス」とは、夏休み期間に開催される小学生を対象とした実験教室である。講師は大分県理科・化学教育懇談会に所属する教員が務める。

私の実験テーマは「DNAをみてみよう」。参加した初回から十年一日のごとく、実験テーマは不変。基本的な実験内容自体は変わらない。ただし、その対象となる材料は、実験中の子供たちの表情や観察から、「臭い」と不評だった玉ねぎからブロッコリーへ、そして現在はバナナへと変わっている。

夏休み子供サイエンスの第1回目は、教員として教壇に立ち、二十歳前後の学生対象に話し始めて半年経たないころである。もちろん、それまで小学生を対象に何か話したこともない状態。身近に子供もいなかったため、「自分自身」のことを「先生」と言えばいいのか「おばちゃん」と言えばいいのかもわからず、大汗をかきながらの講師体験であった(ちなみに現在は、厚かましくも『おかあさんといっしょ』のお姉さんのつもりで“のりのり”で講師ができるまでになった)。

この時、緊張や不安からかいた汗は“冷や汗”ではな



夏休み子供サイエンス

かった。子供たちの笑顔や歓声を受けた心地よい汗であり、「もっと理科の楽しさを知ってもらえる機会がほしい」という気持ちが初めて芽生えた瞬間でもあつた。いま思えば、これが私の転機の始まりだったのかもしれない。

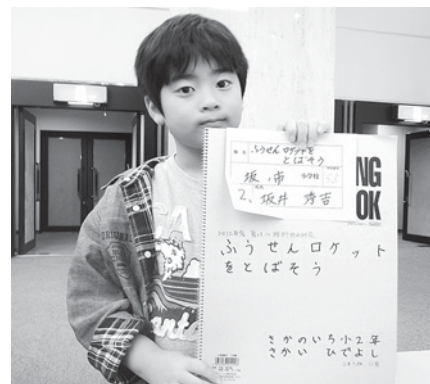
なお、後日参加してくれた一人の小学生の男の子から「大分市理科自由研究作品展で金賞を取りました。ありがとうございます。」という連絡をいただいた(余談だが、わが息子も小学2年生の時から理科自由研究作品を出品している実験好き男子である。この4月から中学生になる息子であるが、小学生時代は毎年、夏休みに実験してはまとめ、大分市理科自由研究作品展で作品展示されるように、2015年度から2年連続でその作品が県内の小学校に回覧されることになった)。

初回から数回は、DNAを取り出すだけの実験であった。実験の変化や工夫は材料の選択のみ、それだけ余裕がなかった証拠である。その後、取り出したDNAを「指で触ってみたい」というサポート学生や小学生の声を参考に実験内容を検討。「指で触る」や「取り出したDNAを再度水の中に入れて溶けるか調べる」という内容を盛り込んだ実験に変化させつつ、現在に至っている。

新たな夢への挑戦

「大学」という組織に所属する学識経験者であること、「工学部」という理系の女性であるということ、さらに、ささやかながらバイオ系の知識があるということ。いつの間にかこの三つが私の強みになっている。止まりかけながらも足踏みを続けていたおかげで、職場外で専門知識を活用する場を時々だがもらえている。

大学時代に学んだ専攻は今の職場内ではほとんど活用できていないという事実は変わらない。その事実は変わらないが、モノの学び方や、考え方、調べ方、分析の仕方など、基礎的なことは現在の職場で、知識として最大限に活用している。



初めて理科自由研究作品展に選出(息子、小学校2年生の時)



白衣を着て気持ちを盛り上げてスライム作り

もちろん、「研究者でいたい」「科学者でありたい」という夢が潰えたわけではない。息子と一緒に実験したり、観察したり、息子の友人が自宅に遊びに来た際に、一緒にスライムを作ったりするうちに、その夢は「子供たちにもっと理科の楽しさを伝えたい」と変化してきた。

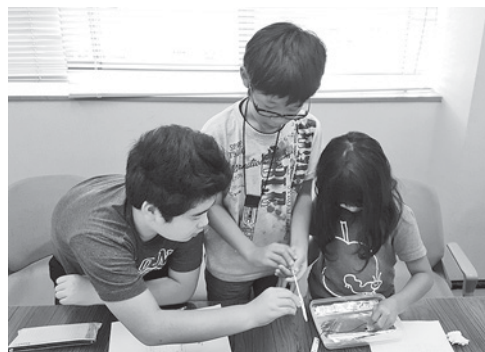
至る所で「定年退官したら理科実験教室がしたい」「いつか子供たちに理科実験を教えたい」と話しながらも、行動に移せず、「新たな夢実現はしばらく先まで温めておくべきだ」と封印してきた。

話しているうちに「いつか、じゃなく、今からやれば」と息子や友人から背中を押され、2016年3月から月1回のペースで近所の公民館を借りて実験教室を行っている。

何よりうれしいのは、「いままで一回も理科自由研究を出したことはないのに今年はお出しました」という子供たちが出てきたこと。自分が果たせなかった「研究者でいたかった」「科学者でいたかった」という思いを、理科実験教室を通じて次世代の子供教育につなげている。

おわりに

息子の宿題を教えつつ、原稿を書いたり、講義の準備をしたりするのが私の日常である。朝は5時に起きて朝食の準備をしたり、息子の勉強を教えたりすることから一日が始まる。夜は9時に息子が寝た後に、家事を仕上



ムラサキキャベツ液を使ったお絵かき

げて一日が終わる。

この4月から息子は中高一貫の私立中学に通うことになった。また、私の生活スタイルもキャリア形成も変わるだろう。息子が地元の中学ではなく、受験をしてまで中高一貫校を希望したのは「科学部」が部活動であるからだそうだ。そんな息子の夢は『科学者』。いつの間にか、私の夢の続きを息子が歩き始めてくれている。

一旦就職し、その後、どうしても研究をしたいと博士課程へ進学し直し、学位を取得後、バイオ系キャリアを築いていく予定だった。学位を取得したものの、いつの間にかバイオ系キャリアデザインからは程遠く、母業中心の日々、それが現在の私の日常なのである。

母業中心はあるが、母親だからできる理科実験教室の内容（家庭の中にあるものだけでできる基礎的な理科実験のネタ探し）を考えたり、アレンジしたりすることがいまは楽しくて仕方がない。

女性のキャリアの作り方は、男性のキャリアの作り方と比べ、多岐にわたるはずだ。もちろん、子供がいることで制約が増えるのも事実である。しかし、子供がいることで時短術や段取り術が、私の場合、格段に変化、進歩した。そして、夢も変容した。

足踏みでもいいから歩みを止めないこと、それがキャリアデザインをし続け、継続していくことじゃないかと考えている。

<略歴> 1998年3月 熊本工業大学大学院工学研究科応用微生物工学専攻 博士課程終了(学位取得 博士(工学)), 1999年3月 技術士(生物工学部門)登録(登録No. 38550), 2002年4月 日本文理大学工学部環境マテリアル学科 講師, 2010年4月 日本文理大学工学部情報メディア学科(准教授), 2016年4月 同学科(教授)
<趣味> 子育て(子供は息子1人, 2017年4月から中学1年生), 読書, 理科実験, フラダンス